

農村風景は何を語るか

宮口 侗 廸

以下は講演要旨であるが、実際の講演は多くの風景写真を提示しながら行った。

1. 風景と景観について

景観landscapeが客観的な概念として使用されることが多いのに対し、風景という言葉はより心情的で主観を含むと受けとめられ、英語ではsceneryに近い(千田稔など)。文化景観と文化的景観については、金田章裕の整理がある。

2. 風景・光景・情景について

風景はある程度以上の広がりを持ち、年月を経て安定した姿に用いられ、光景はスケールはより小さく、時間の経過の中で出現した状況、たとえば釣り人が川で糸を垂れている様などに用いられる。情景はさらにそこに地元の人が話しかけるなど、さらに人間的な動きが加わった様と考えると、細やかな日本の表現として使い分けができるのではないかと。

3. 日本の農村の原風景

おじいさんが柴刈に行く裏山と、おばあさんが洗濯に行く小川があり、沖積低地がその水で水田化されている。樹木に覆われた裏山、その下に農家、その前に水田という同じ形の農村風景が、九州から東北まで存在する。山は水田農業を補完的に支える入会地であった。共通するのは夏の暑さとあたたかい時期に水が存在することで、雪が降ることは米づくりには悪条件ではない。4メートルの積雪にもかかわらず、山腹に棚田を増やして多くの人が暮らせた新潟県旧山古志村がその極端な例である。全国的にはあくなき水田化の努力が続き、棚田の造成、台地への用水路の建設が行われた。

4. 外から日本を考える

韓国にオンドルという暖房文化があったが、日本の東北地方には暖房文化は生まれなかった。水田耕作は南から広がり、めぐってくる夏に南と同じように米がとれたために、寒さに対処する独自の暮らしを生み出すことがなかったからではないか。また、豪雪地帯で屋根雪の処理に対する工夫が生まれなかったことも、同じように考えることができる。岩手県旧沢内村で50年近く前に、雪と寒さに向き合う家が生まれたのは特筆すべきことである。

ヨーロッパは、二圃式・三圃式などの畑作の生産力の限界から、山を放牧地にして、おびただし数の食用の家畜を飼うようになった。その結果、木のない、牧草地の山々が多く、結果的にすぐれた肉食文化を生み出した。畑作の養分の回復の困難さは、武蔵野の畑作農村の平地林の存在からも実感できる。

日本で肉食が育たなかったのは、水田の生産力の高さが大きくかかわっている。しかし日本を一步出ると、朝鮮半島からユーラシアの多くが肉食の世界である。ただしヨーロッパほど多くの家畜を飼えない西アジアの遊牧民の常食は、家畜の乳であった。

5. 荒地が少ないヨーロッパの農村

EEC以来の共通農業政策による農業支援は、農業は特別という認識に基づく。スイスの牧草地が美しい景観を保持しているのは、国家的な支援によるものであり、結果として厳しい自然にもかかわらず、自給率は日本よりも高い。

6. オーソドックスな日本に対してユニークな日本の存在

西南日本の太平洋側の山地は、冬でも日当たり

がよく、土地を長い期間使えるために、山腹の斜面に焼畑起源の畑作の村が成立した。四国山地がその典型である。現在点々と存在するこれらの集落は、細い自動車道路で結ばれているが、過疎化の進行の中で、高齢者の医療や買い物等きびしい課題に直面している。水田ができない地域では特有の努力と工夫のもとに生活を営んできた。瀬戸内海の大崎下島大長の天まで届くような石垣のみかん畑、宇和島市遊子水荷浦の漁港背後の急斜面につくられた石垣の段畑などがその例であり、生

活遺産とも呼ぶべき風景である。

7. 農村風景が語るもの

農村風景は、それぞれの地域における暮らし方が定着したものであり、人々の価値観とその多様性を語る。ここでは、日本が水田を基盤にしたオーソドックスな農村風景と、水田ができなかった地域に点在するユニークな農村風景からなっているという見方を示した。

(早稲田大学)